

光陰似箭

中国研究所60年

(東京大学) 並木 頼寿

ごく最近、尾崎庄太郎氏の『徘徊——中国研究家の回想』という著作を手にする機会を得た。韓国の長編歴史小説『許浚』を日本語に翻訳、日本の読者に紹介している結書房という出版社がある。許浚は李朝中期の「御医」で、『東医宝鑑』という医学書の編纂で知られている。『東医宝鑑』は、身体器官、疾病、薬剤など、人間の健康に関するあらゆる情報を網羅した著作で、東洋医学の一つの集大成として評価され、中華人民共和国の時期においても、人民衛生出版社から影印本が出版されている。歴史小説『許浚』は、その人物像を幼少期から、苦難と研鑽のはてに、医師としての位を極めるまでの一代を描いた大河小説で、TVドラマにもなったという。手に汗握る展開は、韓流ドラマの典型的なものといえるだろう。

ただ、ここでは『許浚』のことではなく、翻訳・紹介に熱心に従事されている結書房のNさんのことに触れなければならない。Nさんとは、非常勤でうかがった大学の「東洋史」の教室でお目にかかる機会を得て知り合った。Nさんは熱心な聴講生として、はるかに年若い学生たちにまじって、こちらのつたない講義を聴いていただいたのであるが、戦前の日中関係についての話になった時、お父さんが尾崎庄太郎氏であることを述べられた。Nさんとの音信はこの間まれであったが、ごく最近、上記の著作をお送りいただいた。Nさんは、このところの中国と日本の間に目立つ相互不信を憂慮し、父＝尾崎氏の戦前・戦後の中国とのかかわりを、あらためて多くの人に知ってほしいとお考えのようである。戦前から戦後の日本における中国研究の展開を考える上でも、また、日中関係についての長期的な展望を検討するうえで

も、その当事者の事績や回想を通じて、具体的な体験・経験に接することは、何よりも重要なことであろう。

尾崎庄太郎氏の『徘徊——中国研究家の回想』は、1981年9月に、東京・西神田の「日中出版」から刊行されたものである。巻末には、日中出版がそのころ刊行していた何冊かの書物を列挙した広告の頁があり、尾崎庄太郎訳『劉少奇の悲劇』、魏京生著、尾崎庄太郎訳『中国民主活動家の証言』、中嶋嶺雄解説『日本共産党と中国共産党』、高橋勇治・米沢秀夫編『文化大革命と毛沢東思想』などの書名を見ることができる。文革の意義や毛沢東の歴史的役割に懐疑的な内容の著作を、日中出版では、数多く刊行していたという記憶がある。そのころ、中国研究所にも文革をめぐる意見の対立が深刻に反映し、中研創立期からのメンバーであった尾崎氏は、すでに研究所にはいらっしやらなかったのである。

しかし、『徘徊』には、中国研究所の創立をめぐる事情が随処に記述されている。

『徘徊』によれば、1945年3月、東京大空襲で尾崎氏らが収監されていた巣鴨拘置所にも火災が発生すると、収監者は豊多摩刑務所に移されることになったという。移送の際には、関係事件ごとにグループに分けて送られたが、「一緒に集合した被告人のうちに、私は思いもかけない満鉄調査部の仲間が何人かいるのにおどろいた。そのなかには、たとえば、小野忍、幼方直吉などの諸君がいた。野原四郎君もいた。彼は民族学の研究者だったがやはり満鉄にはいっていたように思う。かれらはみな後に私と一緒に中国研究所の創立に参加し、理事となった」という。

野原四郎や幼方直吉などの人々が、巣鴨から豊多摩に移送されたのかどうか、不明なところもある。野原氏は、自伝的な文章「在野三十年」（初出『歴史評論』1964年1月号、野原四郎『歴史への視点』研文出版、1982年に再録）のなかで、回

教圀研究所での仕事のことや平野義太郎との関係などにも触れているが、1945年の治安維持法による検挙の体験については、杉並署に収監されたことを述べ、同じく留置されている人のなかに、中国へ逃げ出す前の鹿地亘がいた、としている。また、幼方氏については、本人の記述が確認できないが、内田知行氏作製の年譜（幼方直吉『人権のこえ アジアの歌——幼方直吉著作集』勁草書房、1993年、所収）によれば、1945年のことがらとして、以下のような事項がまとめられている。

一月頃 満鉄大連本社を嘱託として退社し、東京に帰国する。

三月一〇日 東京大空襲……中野区鷺の宮に疎開する。

その後 治安維持法違反容疑により警視庁本富士署に勾留される。

六月一〇日 治安維持法違反容疑により公訴される。

一〇月三〇日 東京刑事地方裁判所において免訴の判決。その後、釈放。

秋頃 平野義太郎・伊藤武雄・岩村三千夫・野原四郎らの各氏とともに中国研究所設立準備活動に参加する。

さて、尾崎氏の記述にもどると、8月15日、「玉音放送」があり、10月には、ようやく自由の身となった。

その時期の中国研究再組織の動きについて、『徘徊』の記述を見よう。

「一九四五（昭和二十）年十一月八日の日本共産党再建準備の全国協議会の講演会には、ここからは、全員が参加した。……それぞれ推薦者二人の紹介によって、日本共産党に入党手続きをすませた。……

さきにあげた全国協議会で久しぶりに元気な顔を合わせた私たち旧友——中西、西里、岩村、浅川健次、尾崎等——は期せずして、中国研究再開のため、研究所をつくらうということになった。」

終戦直後の困難な生活についての記述がつづくなかで、中国研究所の創立前後の事情が述べられる。長文になるが、以下に引用したい。

「こんな生活に追われながらの研究生活ではあったが、私は中国研究所設立のために奔走した。さきに名をあげた私たちは、なるべく幅広く進歩的学者を結集しようと考え、私が終戦前、巢鴨拘置所で顔を合わせていた小野忍、野原四郎、幼方直吉らの諸氏にも働きかけ、平野義太郎氏に音頭をとってもらった。他方では、満鉄調査部でよく知っていた伊藤武雄、具島兼三郎氏が東洋文化研究所を中心に中国研究所設立の準備を進めていた。そこで、この両グループを合流して、中国研究所が一九四六（昭和二一）年一月成立した。創立総会には約八十人の学者・研究者、新聞・通信関係研究者が参加し、加入した。はじめは、研究者協会的なもので、事務所・研究室・図書室もなく、千代田区内幸町の平野義太郎氏の研究室（日華懇談会の看板がかかっていた）を事務所代りに使い、月一、二回の研究会がもたれた。その間、中心のメンバーが研究所の場所探し、資金作りのため篤志家・産業人などの勧誘・説得などにかけまわった。」

なお、前出の幼方氏の年譜には、1946年の条に、「一月二〇日 文京区大塚の東洋文化研究所にて開かれた中国研究所創立総会に参加する」、「九月中国研究所第一回所員総会にて理事に選出される」と記述されている。

さらに、研究所の建物が神田駿河台に移転して以後のことについて、『徘徊』は次のようにつづけている。

「その年、九月になって、やっと、平野氏が末広巖太郎氏らと共に設立していた神田駿河台の政治経済研究所の建物（もと東亜研究所があった）の五階を借り入れ、そこに事務所、研究室、資料室を確立した。機構も確立し、平野氏を理事長に、十五名の理事を置き、数人の専任研究員を置き、

さらに、研究者養成を兼ね、学生または学校を出たばかりの研究志望者を常勤者として、犠牲的に協力してもらうことになった。……

当初には、また、銀行家や資本家、役人崩れまでが、研究所を自分の活動の踏み台にしようと考えてか、かなり顔を出したが、たいしたことはないと思きわめがつくと、次々と去って行った。彼らには、また、研究所が左翼に牛耳られているのを警戒するためらいもあった。さらに、一九五〇（昭和二五）年六月六日に日本共産党幹部が追放され二五日に朝鮮戦争が起こると、政治経済研究所のビル全体が「赤」の巣窟か、その連絡場所のように見られ、当局からも、産業人からも警戒された。」

『徘徊』に見られる記述には、中国で、中華民国の蒋介石政権による政治統合の企図が実現せず、1949年に中華人民共和国が成立して、「新中国」の時代が到来したことについては、直接の記述がない。これには、『徘徊』執筆の時期のもろもろの判断が反映しているのではないかと推測されるが、「新中国」到来の場面を記述しないことから、かえって、終戦直後のいちはやい中研創立の動きなどが、戦前の日本で行われた中国に対する調査や研究の遺産を、どうにか戦後も継承しようとした試みの一環であったのではないかと、といった印象が強められるようだ。

そして、「新中国」の到来は、朝鮮戦争の勃発と切り離せず、GHQの占領政策にも大きな変化が生じ、中研も「赤の巣窟」と見られるにいたったのである。1950年代半ばの様子については、本誌に収録されている川村氏の回想に詳細な記述がある。川村氏は当時を中国研究所の「全盛期」と述べているが、この時期の中研の活動について、尾崎氏の『徘徊』には、ほとんど記述がない。

そして、尾崎氏が記述する1960年以降のできごとについての回想は、苦々しさに満ちた記述といわざるを得ないものとなっている。

「一九六〇（昭和三五）年頃は、私も『毛沢東選集』の翻訳出版の仕事で多忙を究めており、また中国研究所の経営維持も難しかった。また一九六〇年の安保反対闘争も政治的に重大な局面を迎え、研究所の若いメンバーたちは、こちらの方により多くの力を傾けていた。こうした危機的な状況の中で、ともかく研究所が維持され得たのは、全研究所員の一致した団結と犠牲的な献身・努力の結果であった。……書物寄贈に最も大きく貢献したのは平野所長であった。みなはまた企業へのサービスのため調査研究にも力をつくし、財政的基礎を固めようと努力した。経済関係の米沢秀夫君や福島裕君、それに浅川や私などは、こうした方針の下で忠実に働いた。

私たちの戦後の中国研究は、安保反対闘争後の中国の「大躍進」期を一つの転換点として、否応なく分化が深められていったといえる。」

尾崎氏は、つづけて、1960年に平野氏を団長に、米沢・福島・光岡玄・尾崎を団員とする中国研究所の中国友好訪問団が、対外文化協会の招きで訪中したときのことを述べる。当時、「大躍進」政策の失敗による経済破綻に加えて、中ソ対立の激化によって、ソ連の技術援助が打ち切られるなど、中国の社会・経済には困難な事態が生じていた。中国共産党とソ連共産党の深刻な対立は、中国共産党と日本共産党の間にも齟齬や対立の局面をもたらしており、平野団長の中研訪中団も、そうした渦中での事業たらざるを得なかったようである。尾崎氏の『徘徊』には、「個人的にも不愉快なことがいくつかあった」ことが述べられている。この中国訪問によって、「研究者としての私の視野はある程度広がったが、現実の中国にはいたずらな幻想を許さない、冷徹な研究・解明を要する問題が数々あること」を痛感した、とのことであった。

こののち、『徘徊』は、『毛沢東選集』の翻訳・出版をめぐる紛糾の事情について縷々記述し、さ

らに「文化大革命」期の中研の状況について述べる。尾崎氏は、「文革」に共感・支持する一派を「中国の一部の指導者」への「盲従分子」と呼ぶが、彼らによって、1967年2月10日に開かれた臨時所員総会において、尾崎氏を含む九名の人々が「除名」されたという。除名されたのは、平野義太郎・米沢秀夫・尾崎庄太郎・金丸一夫・松本昭子・伊藤敬一などの人々であった。中国における政治的変動が、日本の中国研究者の間にも深刻な見解の亀裂をもたらし、共通の討論の場が許容されなくなり、相互に激しい敵対的な言辞を投げ合うような事態となったといえよう。

ここでは、これ以上、中国研究所を舞台とした中国革命についての見解の相違をめぐる対立状況について、触れることはしない。ただ、尾崎氏の回想にあらためて触れて、戦前からの中国研究の諸潮流を継承して、戦後、一つの新しい研究の場の形成が、中国研究所を舞台として展開したことを再確認した。また、関連して、霞山会や東方学会など、中国研究所とは異なる場の模索や形成と重ね合わせて、さらに調査・研究活動の歴史を調べてみたい、という思いを強くしている。同時に、中国研究所の成立と初期の運営にあたり、平野義太郎という人物の重要性が、やはり問題となるように思う。戦前に講座派の代表的論客であった平野は、敗戦直前の時期に、のちに竹内好によって手厳しい批判を受ける大著『大アジア主義の歴史的基礎』を刊行している。この刊行時と中研創立の時間差は、敗戦をはさんで、七・八か月にすぎない。中研の創立に集まった人々の中には、平野とさまざまな関係にあった人が多く、それゆえに、彼が理事長に推されたのであろう。

さらに、六〇年代・七〇年代の「文革」前後の時期について、中国の政治変動に日本の中国研究が翻弄された時期ではあるが、そこでの対立や議論がどのようなものであったのか、あらためて、一定の距離感を保ちながら再検討してもよいので

はないか。中研は当時の諸々の対立の現場であった歴史を有するだけに、再検討の作業についても、一定の役割を果たすべきものといえるのではなかろうか。